令和４年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

1	評価領域	教育環境

①	重点目標	感染症予防の徹底等、安全・安心な教育環境の確立	P
②	現状	・毎日の教室や教具の消毒、職員と児童生徒の食事場所を別にするなどの新型コロナウイルス感染症対策を実施している。感染拡大時の対応を立案し、職員間で共有して感染の拡大防止の準備を整える必要がある。 ・医療的ケアに係るインシデントがいくつかあり、反省を活かして対応策を検討、関係者での共通理解を図っている。	
③	具体的な目標	・家庭や関係機関との連携による心身ともに安定できる教育環境の確立 ・医療療育センターとの連携による感染症予防と拡大防止	
④	目標達成のための方策	・日常的な予防対策と感染症予防教育を徹底する。 ・警戒レベルや感染状況に応じた対応策を策定し、関係者間で共通理解する。 ・複数の場面を想定したカニューレ抜去時の緊急時対応訓練を実施する。	
⑤	具体的な取組状況	・警戒レベルに応じ場面ごとに対応指針を作成し、随時学校医の助言を受けて、感染拡大を予防する手立てを講じながら、養護教諭による手洗い指導を実施した。 ・カニューレ抜去時等様々な場面を想定して、緊急時対応訓練を学部ごとに実施した。	D
⑥	達成状況	・主治医等との連携により、大きなアクシデントはなかった。 ・新型コロナウイルス感染症対応については、学校医のご指導をいただきながら、影響は最小限に抑えられたものと思う。	D
⑦	自己評価	（評価） A （根拠） ・児童生徒、職員、保護者の感染症対策意識が向上した。 ・児童生徒や職員の陽性発生に迅速に対応し感染拡大を防いだ。 ・学習集団の柔軟な変更、ICT の活用等により、感染予防と学習保障の両立を図ることができた。	C

↑
↓ 評価基準　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

⑧	学校関係者評価と意見	（評価） A ・医ケア児の校外学習では看護師の同行ができたことは、素晴らしい取り組みだと思う。 ・家庭や医療機関と連携して感染拡大等に努め、児童生徒へ適切な教育環境を提供していたことを強く感じた。 ・コロナ禍ではあるが、予防策の徹底により安全・安心が保障され、充実した活動ができていると思った。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・基本的な感染症対策について、家庭にも呼びかけて確実に実施する。保健便り等で児童生徒と保護者に周知・確認したり、職員会議等で職員との共通理解を図ったりして迅速な対応を目指す。 ・インシデントだけではなくヒヤリハットについても、当事者間で迅速に振り返りと反省を行い、対応策を関係者で共有し再発を防ぐ。	A

令和４年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

2	評価領域	教育課程

①	重点目標	カリキュラムマネジメントの推進とＩＣＴ等を活用した授業改善	P
②	現状	・教科横断的な内容を意識する必要がある。 ・児童生徒は日常的にICT機器に触れる機会が増え、授業への活用は徐々に広がりつつあるが、活用の幅は狭く、まだ十分とは言えない。	
③	具体的な目標	・主体性の伸張に向けた取組の充実 ・教科横断的な指導を意識した年間指導計画の作成と実践 ・ICT 等を有効活用した児童生徒の学力向上と学校生活の充実	
④	目標達成のための方策	・類型チーフ会で進捗状況の確認と情報共有を行い、類型毎に教師間の共通理解を図り、「課題の明確化→改善策の検討→授業実践→評価・改善」を行うとともに、年間指導計画へ反映する。 ・ＩＣＴの活用に関する職員研修を実施して職員のＩＣＴ活用能力の向上を図るとともに、様々な場面でＩＣＴを活用した授業を実践する。	
⑤	具体的な取組状況	・定期的なミーティング及び類型チーフ会を実施し、学習内容を検討し、授業改善や年間指導計画に反映した。 ・職員会議後にＩＣＴに関するミニ研修会を実施したり、多くの職員が民間の研修会を積極的に受講したりするなどして、授業への活用方法を広げるための基礎知識を学んだ。	D
⑥	達成状況	・グループ研究会を月１回実施し、授業づくりや教育課程について検討することで職員が新学習指導要領の趣旨を理解し、全員が教育課程編成に携わった。 ・情報教育部のリードにより、ほとんどの職員が授業にＩＣＴを活用することができた。また、様々な機器の授業での活用、遠隔操作ロボットの活用、課外クラブ（ｅ-sports）の活動、他校との交流、作業製品販売会での地域住民との交流など、多様な取組を行った。	D
⑦	自己評価	（評価） A （根拠） ・新学習指導要領高等部完全実施に対応したほか、年３回の教育課程検討委員会において PDCA にもとづき継続検討した。 ・ＩＣＴについては、各教科等のねらいに応じたアプリや機器の積極的な活用等により表現力の向上につながり、着実に推進できた。	C

↑
↓ 評価基準　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

⑧	学校関係者評価と意見	（評価） A ・学校評価や反省を踏まえて、教育課程や指導計画等を見通しながら、一人一人に応じた授業改善に取り組んでほしい。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・引き続き、全職員で共通理解しながら、カリキュラム・マネジメントを進める。 ・ＩＣＴについては、ただ操作を楽しみ親しむ段階から、より学習効果を高めるための活用につなげられるよう、教師の活用能力を高める研修や情報共有により、授業の質を高める工夫を行う。	A

令和４年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

3	評価領域	生き方指導

①	重点目標	児童生徒の主体性の伸張と生涯学習につながる資質の育成	P
②	現　　状	・令和２・３年度は「児童生徒が『自ら学ぶ』姿を目指して」をテーマに掲げ、研究に取り組んできたが、目標設定の明確化、各教科間の関連、評価の在り方が課題となった。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、学部や全校での合同学習や校外学習等の体験学習が十分に行えない状況にあり、直接体験や交流の場が少なくなっている。	
③	具体的な目標	・児童生徒主体の学習活動の実践により、生き生きと「自ら学ぶ」姿の実現 ・直接体験及び間接経験の機会の拡充と課外クラブ実施、医ケア児への支援拡充	
④	目標達成のための方策	・一人一授業提示により、目標やめあてを意識し、児童生徒主体の学習活動を実施し、評価する。 ・ＩＣＴを活用して授業に取り入れ、主体的な取り組みや表現力向上につなげる。 ・情報提示や研修方法を工夫して、保護者や職員のキャリア教育理解を深める。	
⑤	具体的な取組状況	・一人一授業は全部で８１授業実施し、指導のあり方について具体的に検討した。 ・ＩＣＴ活用により、他校との遠隔共同学習や居住地校交流等を実施した。また、アバターロボットによる遠隔作業学習製品販売、ｅ-sports体験を実施した。 ・多くの人が目にする玄関や廊下に進路関係の情報を掲示したり、キャリア教育につながる各学部の具体的な取組の記事を掲示したりした。 ・青年学級を参集とオンライン参加の併用で年５回実施した。	D
⑥	達成状況	・ミニ授業研究会は少人数で実施したが、手立てやめあての設定など、具体的な内容に触れる協議ができ、すぐに授業改善に反映することができた。 ・キャリア教育や進路に関して小・中学部の保護者からの質問が増えた。 ・青年学級の実施により、卒業生が会い、楽しみ、仲間を増やす機会を創出できた。	D
⑦	自己評価	（評価） A （根拠） ・全体研究に関する職員アンケートでは、９２％の職員が授業改善・授業力向上につながり、主体的な姿につながったと回答している。 ・ＩＣＴを活用し遠隔で多様な人との交流や経験を促進するとともに、個々の表現の幅を広げ、主体性を引き出す授業を展開することができた。	C

↑
↓ 評価基準　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

⑧	学校関係者評価と意見	（評価） A ・ICTの活用のほか、課外クラブ、居住地校交流、他校との学習交流など、児童生徒のニーズに応じた積極的な取組に期待する。 ・コロナ禍ではあるが、課外クラブをはじめ、地域の人々との交流の場をたくさん作ってほしい。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・研究の成果を次年度に引き継ぎ、児童生徒がより主体的に活動し、「深い学び」を実現する姿を目指した授業改善を推進する。 ・身体障害や病弱の児童生徒が、さまざまな人と関わり合い社会参加する方策のひとつとして、ＩＣＴの活用方法をさらに工夫する。	A

令和４年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

4	評価領域	センター的機能

①	重点目標	病弱教育サポートセンターの充実とセンター的機能の拡充	P
②	現状	・病弱教育アドバイザー及びコーディネーター等が、２５市町村教育委員会、１５高等学校に訪問し、病弱教育サポートセンターきらり☆のスタッフが２園７校１５回の学習等支援や、５病院で１８校１８名に対し２１６回の学習支援等を行った。 ・特別支援学級設置校訪問は、肢体不自由学級設置校は約８割、病弱・身体虚弱学級設置校は約４割の希望があった。	
③	具体的な目標	・病院内訪問教育や相談支援の推進と在籍校主体の病児支援の充実 ・関係機関や特学と連携したネットワーク構築と県内全体の肢体不自由教育の充実	
④⑤	目標達成のための方策	・医療療育センターの連携ケース検討会や育成部面談で情報交換したり、特別支援学級設置校の担任や学校の悩みや課題を聞き取り、本校の取組を紹介したり、全県の教職員を対象に研修会を実施したりする。 ・関係機関との情報共有や支援の共通理解を図った。 ・病弱教育サポートセンターきらり☆の支援内容等について行政・医療・教育の各機関に周知するとともに、効果的な情報発信等ニーズに応じた教育活動支援を行う。	
⑥	具体的な取組状況	・医療療育センターと連携しながら、連携ケース検討会や育成部との面談を企画・調整して実施し、資料もデータ化した。また、「放課後等デイサービス事業所との情報交換会」を初めて実施し、関係機関との情報共有や支援の共通理解を図った。 ・市町村教育委員会や総合病院を直接訪問し、病弱教育サポートセンターの支援内容等の周知と併せ、地域の状況についての聞き取りを行い、実態把握に努めた。	D
	達成状況	・病弱教育アドバイザー及びコーディネーター等が、２５市町村教育委員会、１５高等学校に訪問し、病弱教育サポートセンターきらり☆のスタッフが１園１４校３６件の相談支援等や、５病院で１３校１３名に対し９７回の学習支援等を行った。	D
⑦	自己評価	（評価）A （根拠） ・対面とオンラインを組み合わせた研修会や、少人数のオンライン相談「きらりサロン」を初めて実施し、各校担当者の専門性の向上を図った。 ・市町村教育委員会、総合病院、学校と連携して、情報交換・検討会を実施するなど、迅速にニーズに応じた支援を行うことができた。	C

↑ 評価基準 ↓　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない　Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

⑧	学校関係者評価と意見	（評価）A ・コラソンもでき医ケアのサポートが充実し良かった。 ・アバターロボットなど、新しい情報を取り入れながら取り組んでいることを感じた。 ・県内における病弱教育をリードする特別支援学校として、情報提供や学習支援、相談活動などに一層の力を発揮してほしい。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・「きらりサロン」は年間計画を提示するなど積極的に周知を図り、オンラインも活用しネットワークづくりを進める。 ・入院児童生徒の円滑な復学を目指し、ICT 機器を活用して実施する。支援に当たっては、関係者間の円滑な連携により、在籍校が主体の支援となるよう配慮する。	A